

(シラバス No.19) (研究指導科目)

科目名	博士研究指導Ⅱ 英語名：Directed Study Ⅱ	必修/選択	必修
		単位数	2単位
		担当教員	専任教員

【授業概要】

博士研究指導Ⅱは、学生が教員からの個別指導を受けながら実施していく。具体的には、①博士研究指導Ⅰに続き先行研究をさらに深め、②博士研究指導Ⅰで作成した研究計画に基づき、調査研究を実施し、③結果を研究としてまとめ、学会発表し、査読付き論文として投稿する（または「課題研究」としてまとめる）とともに、④その論文が博士論文全体のどこに位置づくかを考えながら、博士論文の章立てを検討する。その過程においては、現場での研究の実施にあたり、研究実施上での困難を教員と相談しながら解決し、よりよい実施方法や、よりよい改善策を見いだしていく。また、論文作成においては、実践の成果を学術的な文脈の中で捉えなおし、研究として示していく過程を学ぶ。

(△₁ 今津 孝次郎)

選択した研究方法について学校臨床社会学的な先行諸研究と対話しながらその詳細を設定する。とりわけ「介入参画」法を手掛かりとして独自の「介入参画」方法を練り上げて調査を実施する。そこから得られた量的・質的諸資料を整理し分析して考察を展開する。

その成果を学内外で口頭発表するとともに、博士論文の一部となるような査読付き論文又は「課題研究」を作成する。この作成を通して博士論文の章構成を考案し、博士論文執筆に着手する。章構成上でなお必要な先行研究があれば、検討を追加する。また論文執筆上で不足している先行研究文献の検討や実証的諸資料を追加して収集する。

(△₂ 仁平 義明)

博士研究指導Ⅰを経て作成した計画を、発達心理学的な視点あるいは認知心理学的視点も加味して、実践現場の生きた資料の内容を最も活かすような、かつエビデンスとして信頼性のあるデータになるための処理をどう行うか、質的及び量的な処理方法の指導を行う。データに適合した統計的処理・検定、効果量の測定等は、研究に即して個別に指導する。その過程では、適切な段階ごとに成果の学会発表を行い、査読付論文として国内の学会誌や海外のジャーナルに投稿する指導を行う。また、これらのどの段階でも、研究成果が現場の問題解決にどう貢献するかを、「実践家-研究者」の目で考慮できるようになることを目指す。

(△₃ 三輪 建二)

専門職としての取り組みをもとに、教育実践を省察的に探究することや、生涯学習・職能開発の観点から焦点化したテーマについて、博士研究指導Ⅰでの内容をさらに深め、博士論文の一部となる査読付き論文ないしは「課題研究」をまとめる作業を行う。①博士論文の一部を構成する査読付き論文について、先行研究の整理、課題の設定と研究法の選択、研究の実施と成果の考察、考察結果の発表と文章化の作業を行い、投稿する。また、②アクションリサーチ法を含む調査研究法を選択し、実施し、査読付き論文または課題研究の要素の一部を満たす作業を行なう。

(△₄ 三田地 真実)

理論と実践の往還を実現できる教育実践の研究者として以下の点に取り組む。

- ①自らの教育実践の課題を解決するために相応しい実験計画を立案する。
- ②単一事例実験計画法、及び質的研究で明らかにできることを明確にする。
- ③自らが立案した研究計画（単一事例実験計画、複線経路等至性アプローチのいずれか、あるいは両方を用いる）を実際に教育現場で実施する。
- ④博士論文の目的と方法については、上記を踏まえて執筆を行う。

そのために、博士研究指導Ⅱでは、研究のフレームに沿った研究計画が立案できるように文献講読、実践への応用を行う。

(△5) 細田 満和子)

1年次で学んだ理論的枠組みや調査法を用いて、各自で設定した教育・医療・福祉の連携論や病に関する社会学(医療社会学)的考察などの点での問題関心に沿うテーマの探求や仮説の検証を、フィールドワークによる現場の知見をもとに、自律的に実施していくこと促す。その際、調査のデータベースを作成して、分析したり検討したりして仮説を吟味するが、このことがいかに現場の諸課題の解決に結びつくのかを常に念頭に置くように対話を通じて指導する。またその時々の研究進捗状況を鑑みながら、関連学会を含む学内外の場で発表してプレゼンテーション能力を高めたり、参加者と意見交換をしたりすることを奨励し、学術雑誌への投稿を目指すことに関わる指導を行う。

(△6) 児玉 ゆう子)

博士研究指導 I で完成した看護基礎教育や看護継続教育に関する研究計画書にもとづき、博士論文を構成する研究を遂行する。

研究計画に基づき、データ収集、データ分析、評価等、一連の研究過程を通して、研究成果の産出が円滑に進むよう、実践者の現場に則した教育理論の指導を行い、合わせて学生自身が自分の看護医療に対する考え方を明確化した実践研究として公表できるよう指導する。研究の進捗に応じて、それぞれの成果を博士論文の一部となる査読付き論文として国内外での学会誌等に投稿する、ないしは「課題研究」で公表できるよう必要な指導を行う。

(△7) 石原 朗子)

博士研究指導 I で明確化されたテーマ、研究デザインに基づいて実践、調査研究を主体的、自律的に行い、結果を査読付き論文ないしは課題研究論文としてまとめる。学生の実施にあたっては、高等教育などの自身のテーマに関わる理論や実態も踏まえ、かつミクロの視点からマクロの視点まで俯瞰して研究を行えるよう指導を行う。その上で、結果をまとめるだけでなく、今後の実践やフィールドに活かせる知見を導き出すための考察を行う。併せて、論文投稿を実際に行い、内容を投稿論文に凝縮する訓練や、査読対応についても学んでいく。

【キーワード】

研究の実施、実践の一般化と汎用化、省察、課題研究としてのまとめ

【授業の到達目標】

学年を通じて以下の点を求める。

1. 実践の中で、または実践に即して、研究を自律的に遂行していくこと
2. 計画に沿って調査研究を実施していくとともに、そこで生じた課題の解決策を常に検討し、よりよい実践、実施を行うように改善を図っていくこと
3. 実践に関して行った研究の取り組みを通じて、一般化・汎用化を試みること
4. 年度内に実施する研究発表会で発表を行い、また外部の学会発表や論文投稿をする中で得られた指摘や示唆をもとに、研究を改善していくこと

学年末の時点で以下の点を求める。

5. 調査研究の中で、結果を得て、博士論文としてまとめる方向性を決定していること
6. 博士論文の一部となりうる成果を査読付き論文又は「課題研究」としてまとめられていること
7. 博士論文の執筆を始めることができていること

【教育の方法】

スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】

本科目は、教員の個別指導と学生の成果発表、それに合わせた事前・事後の学修からなる。

1) 第一段階

学生は、学年初期の研究発表会において、博士研究指導 I の成果として得られた研究計画の発表を行う。発表の際には、自身の現場をめぐる背景や状況、実践上の特性に合った研究方法の提示を行う。教員は、発表前には、学生が研究計画の適切さや妥当性を示せるよう、また他の教育実践現場の学生にも伝わるものとなるよう、プレゼンテーションの工夫などを指導する。発表会後には、学生から提出された振り返りの内容について対話を重ねる中で、これから実施する調査研究の質がより高いもの

となるよう指導・助言を行う。

2) 第二段階

学生は、博士研究指導 I で作成した研究計画に基づき、調査研究を実施する。その際、教員は、学生が現場で実施している調査研究の状況について報告を受けながら、個別指導の場では、学生が抱えている困難を乗り越えるための方策を共同で検討していく。その際に、解決策を提示するのではなく、研究実施上の困難を学生自身が越えていくため、研究方法の本質に関わる助言を行い、学生自身の考え方・発想を引き出すために協力する形で行う。

3) 第三段階

調査研究が進展してきた段階で、学生はその成果を学会で発表し、合わせて査読付き論文ないしは「課題研究」としてまとめる。その過程で、教員は、学生が実践の特性を生かした論文を作成できるよう、また実践の知見に偏った論文とならないよう留意して指導を行う。つまり、実践についてテーマとしつつも、実践に研究上の理論・概念を用いることや、実践をもとに一般化・抽象化していくための考え方について指導する。そのような過程を通じて、論文作成の点で実践の成果を学術的な文脈の中で捉えなおし、研究として示していく方法を学ぶ。また、教員は、これらの論文が単一の成果として完結することのみにとどまらず、博士論文の中での位置づけを考えるよう指導を行う。

4) 第四段階

論文投稿後は、査読者等からの意見を踏まえて、論文の質を向上させて行くことを学ぶ。合わせて、博士論文の構成を検討し、査読付き論文等の博士論文の中での位置づけを考えていく。そして、博士論文の一部の執筆を開始する。

学生は、年度に 2 回行われる研究発表会で発表を行う。1 回目は前年度の成果を踏まえた発表であり、2 回目は研究実施の経過の発表である。教員は、それぞれの発表で、発表する学生が、多様な分野の他の学生にも分かるプレゼンテーションや予稿を提示できるよう、指導を行う。

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】

本科目の履修にあたっては、博士研究指導 I で、自身の現場をめぐる背景や状況、実践上の特性に合った研究方法を含む研究計画が作成されていることが求められる。

また、この科目の履修にあたっては、基盤科目や専門科目を事前に履修し、方法論の明確化、関連知識の整理をしていることを求める。

【スクーリングでの学修内容】

研究指導教員と学生の合意形成のもと日時を設定し、定期的に研究指導を行う。個別指導にあたっては、学生は調査研究実施上の課題や、前回の指導内容をもとに新たに生じた状況の報告、作成中の論文などを提示し、指導を受け、指導後は、指導の中で学んだことの報告を行うこととする。

また、年度に 2 回、研究発表会を実施する。それぞれの回で発表することを原則とする。1 回目の発表では研究計画を、2 回目の発表では実施中の調査研究の成果報告を行う。いずれの回も他者の発表から学んだ内容についての振り返りを行い、それを通して自身の実践や研究にどう生かせるかを考え、また、自身の発表に関して指摘された点についても検討し、振り返りの報告を行う。

【評価方法】

研究発表会での発表（原則 2 回）またはそれに代替する発表と、その事前学修・事後学修（50%）
当該年度の成果をまとめた査読付き論文又は「課題研究」（50%）

【テキスト】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する

【参考図書】

授業開始後に、研究指導教員ごとに個別に学生に提示する